

# NGO外国人救援ネット・ニュース, No.4

NGO外国人救援ネット, 1997.8.15

請求記号:震災-6-z33. - 12p

\* 震災関連記事のみテキスト化しています

## 巻頭言

NGO外国人救援ネット運営委員長  
日本基督教団神戸東部協会協力牧師  
草地 賢一

去る5月17日神戸三宮で「こうべ地球村」フェスティバルを開きました。これは外国人救援ネットが阪神大震災地元NGO救援連絡会議から独立して1周年を記念して催されました。当日アジア、南アメリカなどの屋台やステージでのおいしい、たのしいものがいっぱいで大いに盛り上がり、今後毎年5月の第2週に開催しようとの声が出ました。主催者のひとりとして嬉しく思っています。

外国人救援ネットの運営委員会は毎回楽しい雰囲気です。スピーディなフットワークが身上のように思えます。

この委員会の構成は非常に変化に富んだメンバーです。代表はカトリック神父、副代表はプロテスタントの信徒及び非キリスト者の女性。運営委員長はプロテスタント牧師、他の運営委員は非キリスト者、カトリックシスター、プロテスタント牧師（内1名は女性牧師）や信徒。つまり極めてエキキュメニカル（宗教、教徒を越えて一緒に...）な集まりなのです。

大震災直後から「外国人救援」という行動を共に実践し、その中で対話を重ねてきた信頼が「即断即決」、「スピード」のある対応を重視してきたのだと言えます。

「Action Oriented Dialogue...」アクションオリエンテッドダイアログ...共に行動する中での対話がこの救援ネットの中で成立しているように思えます。しかもその中にある視点は外国人を疎外する日本社会に「公正」を創り「人権」が侵されないよう文字通り「共に生きる」社会の重視を目指しています。いっしょにやりませんか。

## 地球市民のルートで被災者に救援物資を —イラン大地震被災者支援活動報告—

日比野純一・吉富志津代

NGO外国人救援ネットのメンバーである私たちが、8言語で放送する神戸長田区のコミュニティーラジオ局・FMわいわいの特派員として、ユーラシア横断取材旅行中の97年2月28日にイラン北西部のアルダビルで大地震が起こり、発生から3週間後の3月21, 22日に被災地を訪問しました。

私たちは帰国後に、「事前にテヘランで赤新月社やマスメディアなどから入手した情報と、実際に目の当たりにした被災地の惨状の乖離が著しいため、民間ルートを通じての支援活動が必要」とする報告をまとめ、それを受けてNGO外国人救援ネットとして被災者支援募金を始めることが5月9日に決まりました。しかし、その矢先の5月10日、同じくイラン東部のビルジャンドで死者1700人の被害が出る大地震が起こり、ビルジャンドでもアルダビル地

震と同様の事態が予想されることなどを考え、2つの被災地を対象にイラン地震被災者支援募金活動を5月13日から開始しました。

## ★テヘランで止まる救援物資

当初は、寄せられた義援金は、私たちが3月に被災地を訪れた際に尽力して頂いたテヘラン在住22年の須藤克己さん（YABAN Co. Ltd. 社長）に送金し、現地で救援物資に換えて被災地に届けることを意図していました。

しかし、約1カ月半の募金活動期間で全国各地から寄せられた約300万円という義援金は、イランでは日本の物価にすると3000万円以上に相当する額となります。日本とは比較にならないほど物事が進むスピードの遅いイランで、この義援金を救援物資に換え被災地に送り届けるのは、現地協力スタッフの力だけでは大変な時間と労力がかかることは言うにおよびません。

また、私たちが現地を訪れて被災者に救援物資が確実に届くルートを確認していないビルジャンドの被災地は、現地情報収集などの調査を進めていくうちに、イラン政府およびイラン赤新月社が救援物資統制をとるなど緊急救援活動以降の復旧支援が滞っている様子であることが明らかになってきました。現地入りしたJICAの緊急協力隊からも、「イラン政府は世界各地から寄せられている救援物資等を、次の災害に備えることを目的にテヘランで止めている事実もあり、官のルートを通じての被災者支援活動は非常に難しい」状況にあるとの報告を得ました。

募金活動を開始する際に予測および調査できなかったこれらの要因から、被災者の元に民間ルートを通じて確実に救援物資を届けるためには、私たちがイランに向かい、現地の日本人協力者らとともに被災者支援活動を展開することになりました。

## ★トラックで灼熱の砂漠を1500 km

イラン東部のホラサン州ビルジャンドで1997年5月10日午後零時28分（現れを大きく上回るものと考えられる）。当地は砂漠気候で、夏の日中最高気温は優に40度Cを超え、雨量はゼロ。ところが秋口からは冷え込み、アフガニスタンとの国境に近い山岳地帯の寒さは相当厳しいものとなります。戦火を逃れてきたアフガン難民が多く住む地域であることから、イラン政府は安全保障上の問題などにより被災状況についてはわずかな情報しか公表していません。

今回のオペレーションは、民間ルートを通じて被災者の元に救援物資を届けることを目的としているため、イラン政府およびイラン赤新月社テヘラン本部と一切コンタクトをとることなく、必要救援物資のヒアリング、救援物資受渡しなどのやりとりは、被災者に直面している現地の災害対策本部と進めてきました。

2万644米ドル相当の義援金を元手に救援物資を須藤さんらの全面的協力により卸値で現地調達し、テヘランからビルジャンドまでの片道1500 kmを5 tトラック3台で輸送しました。オペレーションの性格から、輸送中にイラン政府および赤新月社テヘラン本部から物資差し押さえなどの圧力がかかる場合などを想定して、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）テヘラン支所の賛助をとりつけたことで、輸送中の検問はすべてクリアできました。ところが、ビルジャンドが目前に迫った時点で赤新月社ビルジャンド支部に到着時間などを電話で知らせると、先方は「赤新月社本部を通していない外国からの救援物資は受け取ることができない」という、これまでとは一転した態度となり、明らかに中央から圧力がかった様子でした。

これにより長時間足止めを喰う羽目になってしまいましたが、テヘランで留守を預かる須藤さんおよびイラン人協力スタッフの粘り強い交渉の末、「書類上はイラン人協力スタッフが救援物資を届けたことにする」ことで何とか受け取りの承諾をとりつけることに成功しました。

## ★半年以上は苛酷なテント暮らし

テヘラン出発から48時間、灼熱の砂漠をトラックで走り抜け、いくつかのトラブルに見舞われながらも、無事、救援物資をイラン赤新月社ビルジャンド支所物資配給責任者のダドレス氏の立ち会いで物資倉庫に納めることがで

きました。この倉庫からは、被災した148の村の要請に基いて、週2回のペースで被災者に救援物資の配給が行われています。

ビルジャンド周辺の被災地がアフガニスタンとの国境地帯であるという軍事戦略的・政治的理由により、限られた数字以外は公表されていませんが、現地でのヒアリングにより、「200の村が被災し、そのうち148の村の被害が大きく、8つの村は壊滅状態。家を失った5万人は、少なくとも半年は一日の寒暖差が数十度Cの乾燥地帯でのテント暮らしという、非常に苛酷な生活環境を強いられる見通し」であることが明らかになりました。

UNHCRマシャド支所のスーダン所長によると、「今年に入ってイラン国内で3度目の大きな地震のため、救援物資の在庫が尽き、モノ不足は深刻であった」ようです。地震直後の緊急救援は、イラン政府が最大限の人員を動員したほか、フランスのNGO2団体がスタッフ数十名を派遣したことなどにより、「地震から1週間は救援活動がうまくいっていた」（スーダン氏）としていますが、世界24カ国から1200万米ドル（約1億4000万円）の義援金が寄せられたにもかかわらず、「被災者は最低6カ月間は苛酷な自然環境の中でのテント暮らし」（同）を強いられることになる見通しです。

## ★半年たっても救援物資に群がる被災者達

イラン北西部のアルダビル州アルダビルで1997年2月28日午後4時31分（現地時間）で発生した地震は、マグニチュード5.5。周辺の約100村が被災、死者1000人、負傷者約3000人、全壊家屋1万2000戸（=いずれもイラン政府発表。ただし実際の被害規模はこれを大きく上回るものと考えられる）。被災地は、標高2000mを越えるトルコ族が住む山の中の村がほとんどで、地震発生時は最低気温がマイナス30度C、1.5mの積雪に覆われていました。

地震の3週間後に被災地を訪れた私たちが被災地アルダビルで見たのは、雪解けのぬかるんだ泥土に埋まった全壊した家から家財道具を素手でもくもくと掘り出す村人たちの姿だけでした。ボランティアどころか、政府や赤新月社、軍隊の復旧要員の姿はどこにもいなく、村人の話では、地震発生直後の緊急救援活動を終え帰ったということでした。首都テヘランでイラン赤新月社本部、マスメディア、日本大使館などを通じて得た情報から、救援・復旧活動は順調に進んでいるものと考えていたのですが、被災地で見た惨状との乖離があまりにも大きいため、民間ルートを通じての支援活動の必要性を実感しました。

ビルジャンドと同様にこのオペレーションも、イラン政府およびイラン赤新月社テヘラン本部と一切コンタクトをとることなく、必要救援物資のヒアリング、救援物資受け渡しの詳細などのやりとりは、被災者に直面している現地の災害対策本部と進めてきました。

ビルジャンドに救援物資を届け終わりテヘランに戻ってきた翌日から、8708米ドル相当の義援金を元手に下記の救援物資を卸値で調達を進め、テヘランからアルダビルまでの片道580kmを10tトラック1台で輸送しました。途中、何カ所か検問がありましたが、UNHCRテヘラン支所の賛助をとりつけたことで、トラブルなく通過できました。

3月に私たちが現地を訪れた際に赤新月社アルダビル支所およびアルダビル州政府の担当官とコンタクトしていたため、赤新月社アルダビル支部のスタッフが総出で迎えるなか、救援物資を倉庫に納入することができました。この倉庫からは、月2~3回のペースで被災者8万人に救援物資が配給されています。

救援物資を引き渡した翌日、被災した子どもたちにお菓子をプレゼントしようと、3月に訪れた村など最も被害の大きかった5つの村を訪問しました。しかし、子どもたちを押しつけて大人がその菓子に殺到する騒然とした事態になってしまい、図らずも「被災者のモノ不足は解消されてきた」という赤新月社アルダビル支部のミカエルヴァンド副支所長の言葉は打ち消されてしまったのです。

しかし、訪れた被災地の中でいくらか復旧が進んでいる村では、3月に私たちが訪れた際に「日本から救援物資を必ず届けるから」と約束を交わしてきたのですが、まさか本当に救援物資をもって戻ってくるとは思っていなかったようで、再会したときの驚きようと喜びようは見て、「本当にここまで来てよかった」と、今までの疲れが一気に飛んでしまいました。

一方、全壊家屋1万2000戸の内、6割の7200戸が新築または新築中です。新築作業は被災者自らが仕事をおいてと

りかかるため、救援物資の配給は家が建つまで続けられます。新築にかかる費用は1件当たり約30万円。4割は義援金、6割は政府からの借入金で賄うこととなります。最も被害の深刻な山間部の農村は、羊牧と農業で生計を立てていますが、年収が3000円に満たないため、（家畜などの財産があるため単純には論じられませんが）家を再建するのに年収の60倍もの借入れをすることとなります。このため、町に比べて農村の復旧は、数字が示すほど進んでいるようには見えません。

## ★滞日歴のあるイラン人達が進んでカに

今回の活動の中でどうしても触れておきたいことがあります。それは、私たちが3月にイランの被災地を訪問した際に、自ら進んで力を貸してくれた、日本に来たことがあるイラン人たちのことです。最大時40万人という日本に出稼ぎにやってきた彼らは、マスメディアの報道を通してマイナスのイメージばかりが先行しています。しかしその多くは、イラン・イラク戦争で国が疲弊し、やむにやまれぬ事情で日本に出稼ぎにやってきた人たちです。今、その多くは国に帰り、日本で働いて貯めたお金で生活を立て直し、「日本はいいところだった。一度連れて行ってあげたいな」と妻子に話している、どこにでもある普通の暮らしをしています。そのイラン人たちのうち、たまたまテヘランの街角で知り合った数人が、公の機関では全く相手にされなかった私たちの被災地訪問の願いを、あちこち奔走して「民」のルートでかなえてくれたことを、私たちはどんなことがあろうとも忘れません。

彼らの一人は私たちの乗った飛行機が日の出前にテヘランに到着するのを空港で待っていてくれました。また別の一人は2つの被災地に救援物資を届け終わったところに、わざわざ、テヘランから車で迎えに来てくれました。

このことを、私たちはしっかりと記憶に留めておきたいと思います。

### ◆救援物資リスト◆

・発電機（5kW）	4台
・水中ポンプ（2インチ）	10台
・水中ポンプ（3インチ）	10台
・クーラーボックス（大小セット）	200セット
・ティーポット	200個
・ヤカン	200個
・靴	500足
・子供用衣類	556着
・カーペット	600㎡
・毛布	300枚
・大型家式テント（3×4m）	35張
・大型三角テント（3×4m）	35張
・子供向け菓子	小型トラック一杯分